東洋史研究
第十三卷第三號　昭和廿八年三月發行

居延漢簡研究序說

森鹿三

はしがき

ここに居延漢簡というのは、一九三〇年、スウェン・ヘディン氏のひきいる西北科學考査團（The Sino-Swedish Expedition）が中國の西北邊疆エチナ河下流域カラホト近傍で發掘した一萬點に上る漢代の木札文書のことである。この古文書が漢代の政治・軍事・經濟・社會・文化を開明する上での有力な基本史料であることはいうまでもないが、これを學界共有の財産にするまでには相當の紆餘曲折があつた。が結局、勞榦氏の「居延漢簡考釋」四冊（石印本、一九四三年刊）が公表されるに至り、ともかくこの秘寶の全貌が明らかにされた。その書名からもわかるように、本書は居延出土の漢簡を解讀した釋文と、それにもとづく漢代史實の考證とを收める。更に戰後、一九四九年には、本書の活字印刷による新版（考證の部は未刊のようである）が出て愈々一般の渴望を滿たしたのである。前著は既に十年前に公刊されたものであるが、われわれの入手したのはやつと一昨年のことで、これは在北京の今西春秋君の斡旋の賜物である。活字印本の方も、ほゞ時を

同じうしてもたらされ、われわれ同攷者の間に、この漢代の基本史料を研究する機縁が開かれたのである。研究とはいうが、原簡は勿論、寫眞さえ入手しえない現在、たゞ勞氏の釋讀したものを唯一の手がかりにせねばならないので、勞氏の成果の上に、如何ほどの附加ができるか、多少の危惧がないではない。しかしこの二年近くの間、もどかしい摸索をつゞけた結果、この漢代文書に親しみもでき、これを利用する心得もできて來たので、その成果の一部を公表して江湖の批正を仰ぐことにしたのである。こゝに特輯した各篇はいろいろの問題に亙つているから、はじめに居延漢簡ならびにその研究についての概觀をしておきたいと思う。まずこの文書の發見された居延という場所、次に簡と呼ばれるこの文書の書寫材料、その發掘の顚末、またそこに記された內容、そしてそれらの內容についての今までの研究、ならびにわれわれは如何なる立場から研究を進めているかなどについて、以下節を分つて述べよう。

なおこの機會に特記して謝意を表しておきたいのは、われわれの居延漢簡研究に對して昭和二十七年度文部省科學研究費が交付されたことである。そのためわれわれの研究は頗る圓滑に進捗しつゝあつて、この特輯が可能になつたのも、その一つのあらわれであることを申添えておく。

一

さて前にも述べたように、この漢代文書はエチナ河 Etsin-gol, Edsen-gol の下流地方で發見されたのであるが、このエチナ河というのは、遠く青海省境の山脈中に源を發し、西部甘肅のオアシスを灌漑して北方の沙漠に流れ込む河川である。甘肅の邊境にある毛目 Maomu（鼎新縣）の町を過ぎてから、二條または三條の主流とその他いくつかの支流に分れ、約二〇〇哩ばかりゴビ沙漠を北へ流れて、ガシュンノール Gashun-nor とソゴノール Sogho-nor という双子の鹹湖に注ぎ入る（この湖の背後には、すぐ外蒙國境が迫つている）。これがエチナ河オアシスで、長さ約二〇〇哩、幅約三〇哩乃至五〇哩、トルグート蒙古人の住まう、白楊や檉柳が生い蘆葦の散らばる地方である。半荒蕪地方ではあるが、退屈したゴビ

の旅行者にとつては、綠樹と水と憩いのある避難所のように思える場所である。[1] この河の下流に蒙古名をカラホトKhara-Khoto、中國名を黑城と稱する廢墟がある。元の時代に亦集乃といわれ、マルコ・ポーロの旅行記にエシナ[2]と記される都市であつて、その前代西夏王國の頃に繁榮していたことは、今世紀初頭、コズロフ、スタイン氏等の調査發掘によつて實證せられた。[3] この廢墟の中央から東南寄りに漢代の遺跡があるが、これこそは遮虜障であり、後に擴げられて居延縣城となつたものであろう。[4] 漢書地理志によると、居延は張掖郡に屬する縣で、同時に居延都尉の治所でもあつた。そして縣城の東北に居延澤があると記しているが、恐らくその湖水は現在双子湖になつているソゴノールとガシュンノールが連接し今よりも大きな湖であつたと推定されている。さてこの地方が漢代において開發されるようになつたのは、當時、北邊の脅威であつた匈奴の南侵を防ぐためにこの地帶に堡壘を築いたことに始まる。卽ち漢書武帝紀によると、太初三年（B・C・一〇二）の夏、强弩都尉の路博德が居延に築いたと見える。また天漢二年（B・C・九九）夏には、騎都尉の李陵が步兵五千人を率いて居延を出發して北に向い匈奴と戰つたと見えるから、この地が匈奴に對する前線基地であつたことが知られる。また當時この地方はエチナ河を利用して灌漑が施され、自給できないまでも或程度の農業生產も見られ、武帝の末年には搜粟都尉の趙過の案出した代田法が、この地に試行されている（漢書食貨志）。ともかく現在の情景とは異つたものがあつたことは想像できる。

二

次にこの地方で發見された漢簡とは如何なるものか、一應の解說をしておこう。簡というのは、その字形からもわかるように、本來竹で作つたものである。竹の節と節との間の部分をとり、之を縱に幾條かに割つて狹長な形にし、それを剝いで書寫したのであつて、中國では紙の發明されるまでは重要な書寫材料であつた。この竹簡に倣い木片を用いて作つたものを牘と稱するが、居延地方で發見されたものは、後述の一竹簡を除き、すべて木牘である。從つて言葉の正しい使用

法からいえば、これを簡と呼ぶのは不當なのであるが、一般に木牘をも簡と通用しているので、慣例によつて簡と稱することにする。さてこの木簡に使用された木材について、居延發見のものはまだ調査されてはいないようであるが、居延よりも二十數年前、敦煌において採集された漢簡については、白楊木(Populus alba)を用いたものが最も多く、この外に松柏科の植物を用いたもののあることが報告されている。[5] 因みにこの近傍で松柏科の植物が生育している場所は、エチナ河の發源する南山山脈である。なお敦煌簡の使用木材に關しては、その後、新たに採集されたものについて中央研究院植物研究所の何天相氏が切片顯微鏡方法を以て鑑定したが、その結果によると、次の四種の木材が用いられている。[6]

一　中國名を青杆(山西)、あるいは杆兒松(河南)といい、學名を Picea neoveitchii Mast. という、雲杉の一屬で、中國產のもの十二種を數える。本種は湖北省の東北部から陝西・山西・甘肅方面の高山に植生する。木材は淡白で、質は輕疎である。

二　中國名を毛白楊、學名を Populus tomentosa Carr. という、本種は甘肅および華北一帶に均しく分布する。

三　中國名を水柳、あるいは垂柳、垂枝柳といい、學名を Salix babylonica Linn. という、中國の柳屬は五十餘種を數えるが、本種は揚子江以南の各地に常見するもの、しかし北方にも栽植することが可能である。

四　中國名を檉柳あるいは紅柳、學名を Tamarix chinensis Lour. という、本種は青海・甘肅・新疆の沙漠中に常見する植物である。

居延簡も恐らく同樣に楊柳科あるいは松柏科の植物が使用されていると推察される。これらの簡は書寫された後にも更に削つて何度も使用されたらしく、居延簡の發見者 Folke Bergman も、そのことを言及している。敦煌簡の場合では、松柏科の植物を使用したものに、この削衣の簡の多いことを、夏鼐氏が指摘している。思うに前線基地ではこの種の木材が得易くなかつたためであろう。

次に簡の形狀は長短廣狹いろいろあつて一定しないが、敦煌簡によつてみると長さ二三センチ、幅一センチぐらいのも

のが最も多い。二三センチは大体漢の一尺に當る。この一尺の木牘に書寫したことの名殘を今も尺牘という語にとゞめている。このような狹長な簡にはせいぜい四十字ぐらいしか收めえないので、文書を記す場合には之を何枚か連綴する必要が生ずる。それでこれらの簡を横に並べ上下二ヶ所を絹・麻などのより糸で編綴する。冊の字はその形を象つたものである。また各簡の上端に近い部分に圓孔を穿つて糸を通す方法もあつた。從來發掘された漢簡は殆ど斷簡零墨であつたが、居延では完全な冊書が二件發見されている。殊にその一つは七十八簡を麻繩で編綴していて誠に珍重すべきものである。[7] これらの文書を發送する時には蓋（檢と稱する）をおき縱横に繩でくゝつて、その結び目に封泥を施し、印を捺して封緘するのである。[8] また書寫に際して筆墨を用いることというまでもないが、居延からは完好な筆が一本、簡にまじつて發見されたことを注意しておこう。[9]

三

ヘディン探檢隊のベルグマン氏がはじめて漢簡を發見したのは、カラホトの東南三〇キロにあるボロツォンチ Boro-tsonch においてゞある。この探檢隊が最初に西行した際には、一九二七年九月二十四日にこの地で野營しているが、野營地のすぐ西に高さ約三五メートルの丘があり、一行中の數名はその頂上の砦を調べるため、翌朝丘に登つている。調査者の一人である中國の考古學者、黄文弼氏はこれを漢代の遺跡と推定した。そしてそこでは無數の陶片と爐跡が認められたという。[10] ベルグマン氏は三年後の一九三〇年四月二十日に改めてこのボロツォンチの漢代遺跡の調査發掘に從つたのである。[11] この遺跡の實測圖を作つていた彼は、ペンを落としそれを拾おうとして腰をかゞめた刹那、ペンの傍によく保存された漢代の貨幣（五銖錢）を發見した。そこで翌朝から本腰を入れて綿密に調査をすることになり、遂にこゝから木簡を發見するに至つたが、文字の書かれている木簡と共に、前に述べた再度の用に供えるために削がれた簡を見出している。ボロツォンチで發見した簡は約三百六十點であるが、[12] 勞氏釋文のいずれに當るかは確定できない。たゞそれらの簡の中に

"the chief of 30 ching" と認められたもののあることを述べているが、これは居延都尉に隷屬していた「世井候官」のことである。因みに勞氏は世井候官をボロツォンチに比定している。[13] ともかくベルグマン氏はボロツォンチにおける漢簡——その外に前述の五銖錢などの貨幣、銅鏃、鐵斧頭、陶器等をも——の發見に勇氣をえてエチナ河地域の漢代遺跡を次々に調査發掘し、遂に翌年五月北京に歸還するまでに一萬點に及ぶ漢簡を採集したのである。これらの遺跡の中で最も多く簡のえられたのは、カラホトの西南方七〇キロ、エチナ河岸に位するムヅルベルジン Mu-durbeljin であつて、ここで約半數の四千點を獲得した。[14] 年號を記したものも多く始元六年(B・C・八一)から建武元年(A・D・二五)まで平均四年おきに紀年のある簡が存する。從つてこの障塞は前後百年間斷續することなく保持されていたことが知られる。またこゝは北から數えて十七番目の堡壘で、馬衡・勞榦兩氏[15]は甲渠候官——居延都尉に屬する——に擬している。こゝについで簡の多く發見されたのはタラリンジン・ヅルベルジン Taralinjin-durbeljin であつて、その數約千五百點、その中には太初三年(B・C・一〇二)、始元三年(B・C・八四)、同四年、同五年などムヅルベルジンのよりも古い紀年の有るものも見出される。[16] 勞氏の釋文を披見するに、

延壽迺太初三年中又以負馬田敦煌延壽與□俱來田事已(三〇三・三九、五一三・二三)

というのが、太初三年の紀年がある唯一の簡であるから、この簡はタラリンジン出土と考えてよいであろう。なおこの地が漢代の如何なる城塞であるかについては、若干の疑義が存する。というのは一九四二年この地方を踏査した勞氏が、スタイン氏の地圖によつて大灣城を以てタラリンジンとなし、次のように述べているからである(同氏考釋後語)。

甘肅省界を出て二十五華里にして大灣城に至る。この城は三重になつており、規模きわめて大である。內城は東西約七〇メートル、南北約一〇〇メートル、東門の外に夾城があり、それは東西約二三メートル、南北約四五メートル、外郭は方二二〇メートルである。しかしこゝで採掘しえたものはみな唐以後の陶片であつて、全く漢時の遺跡は見當らない。はじめはカラホトを前漢の居延城とし、後漢以後の居延城はこゝ(タラリンジン)に假定したのであるが、試

掘してみて漢代の遺物が發見されぬ以上、この想定も確實に裏付けられないのである。

といつて、タラリンジンが唐以後の城郭であること、少くとも漢代のそれではないことを、その試掘の結果を楯に力説しているからである。そして勞氏は大灣城の北方五華里にある地灣城（スタインの圖に Ulan-düriljin という）を以て漢代の肩水都尉[17]の治所に比定している。カラホトの居延都尉に匹敵する大城が、僅か五華里を距てゝ存在していたならば、このタラリンジンはたかだか一亭燧にすぎぬものと考えられる。しかるにこの地においてベルグマン氏は大量の漢簡を採集しているのであるから、これを單なる一亭燧とみなすことも躊躇されるわけである。むしろこの千五百點の漢簡を出土したタラリンジンを以て肩水都尉に擬定できないであろうか。

ともかくベルグマン氏はエチナ河地域の堡壘址を次々調査發掘し、一萬點の漢簡をあつめて一九三一年五月末、北京にもたらし歸つた。そしてこの漢簡の解讀・飜譯には北京大學の馬衡・劉復兩氏とスエーデンのカルルグレン氏が當ることに豫定されていた。もしこの事業が順調に運んでいたならば、原簡の釋文に寫眞も添えられ、歐州語にも飜譯せられ、相當早い時期に學界公有の財産になつていたろうと思われる。あたかも三十年前に發見された敦煌簡に對して、羅振玉・王國維兩氏の「流沙墜簡」と E. Chavannes 氏の "Les Documents chinois découverts par Aurel Stein" が公刊せられたように。しかるに日華事變・太平洋戰爭のために、この事業の遂行は阻まれ、折角できた原簡寫眞の原板も一九三七年秋、上海に戰火が波及した時にすつかり燒けてしまい、香港において再度厄災にあつた。しかし最初からこの仕事に熱意を示していた勞榦氏は、わずかに殘つた寫眞の副本をもとにして、三たびこの事業に從うことになつた。四川の奥地では寫眞印刷も意に任せぬため、この度は影印を斷念して釋文と考證の二部を出版することにしたのである。[18] これが一九四三年に四川南溪で公刊された「居延漢簡考釋」である。その自序によると、この釋文は勞氏のほか馬叔平（衡）・向覺明（達）・賀昌羣・余讓之（遜）の諸氏によつて着手せられ、日華事變前にはその一部分ができ上つていたようであるが、結局勞氏が獨力で完成したものであつて、その千辛萬苦は筆舌に盡せぬものがあつたであろう。さて本書の釋文の部では原簡

の隷体文字を釋讀して、楷書体に改め、その內容に從つて次の如く類別している。卽ち文書・簿錄・信札・經籍・雜類の五篇にまず大別し、文書を更に書檄・封檢・符券・刑訟の四類に、簿錄を烽燧・戍役・疾病死傷・錢穀・器物・車馬・酒食・名籍・資績・簿檢・計簿・雜簿の十二類に再分する。この分類は自序にもいう如く、王國維の設計した「流沙墜簡」の分類を變通して成つたものであるから、王氏のそれに比し頗る合理的に整備している。しかし何分にもフラグメンタリな斷簡のことであるから、具体的には正しく分類されているかどうか疑いがないでもない。なお活字印本には附錄として敦煌漢簡校文を收錄している。これはシャヴァンヌの釋文ならびに排列に準據し、併せて王氏の「流沙墜簡」、賀昌羣氏の同補正(圖書季刊第二卷第一號)と校合し、更に勞氏自ら新釋した校語を加えたものである。敦煌漢簡の新テキストとして學界に歡迎さるべきものであろう。また卷末には簡號索引を附しているが、これは原簡の出土地別の番號から、分類されてしまつた釋文中の簡を檢索する便宜のために作製されたものである。整理の不備あるいは印刷の際の誤植のためか、必ずしも正確でなく、今一段の工夫と用意が必要と思われる。

以上、居延漢簡發見の顚末から勞氏の考釋に結實するまで十數年間の過程を回顧したのであるが、その過程を通じ、また考釋出現後において、本史料に對し如何なる研究がなされたかを併せ述べておこう。最も早くから、また最も長くこの簡に接しているために、勞氏の業績が最も多い。考釋の考證の部が包括的な代表作であるこというまでもないが、史語所集刊その他の誌上にも多くのモノグラフを發表している。勞氏の外には賀昌羣・陳槃・楊聯陞の諸氏のものがある。詳しくは別稿の簡牘研究文獻目錄を一覽されたい。

なお序でを以てベルグマン氏蒐集以外の居延漢簡について一言する。その一つは現在、中央圖書館に所藏するもので三十簡を數える。[19] その中の一簡は無字、も一つの簡はよめなくなつているが、他の二十八簡は有字(面背兩面に書寫されるもの七簡を含む)、また有字のものに竹簡が一個存する。何時發掘したか不明であるが、その內容を見れば居延漢簡であることは疑いない。[20] も一つは黃文弼氏が駱駝曳きから入手した數簡であるが、それは一九三一年のことであり、またそれらの

簡はエチナ河畔で採取したという。事實、その內容も明らかに居延簡である。この外にも同例があると思うが、氣付いた二例をとりあえず掲げて、更に今後同種史料の增加することを期待しよう。

四

カラホト地區出土の漢簡が、漢代史研究の基本史料であり、そしてそれが學界公有の形で提供された現在、われわれとしても、これらの漢簡を十分に攝取し享受しなければならない。しかし現在提供されている形式では、まだ十分に之を驅使することは困難であつて、もつと歸納的に整理しておく必要がある。そこでわれわれは先ず勞氏の釋讀した所を逐簡味讀することから出發した。そして簡相互の比較研究、敦煌簡との對比などを行つて、ともかく主要な簡は一應讀了するに至つた。その傍ら人名・地名・官職名・成語の索引を計畫しているが、現在は人名索引に努力を集中している。それから前述の如く勞氏の釋文は既に一定の分類方針を立てゝ整理されてしまつているので、同一地點から出土した簡を一括總覽するのに不便である。敦煌簡の場合には出土地によつて排比したシャヴァンヌと內容によつて類別した羅・王兩氏のものと併存しているが、居延簡もやはり兩種の排列があつてしかるべきであろう。尤も勞氏の釋文には、簡號索引が附錄されてはいるが、それはまだ不備であり不正確でもあること、前述のとおりである。それでわれわれは、類別された一萬點の居延簡を、もう一度もとに返して、これを出土地點別に排列しなおすことを計畫し、現在までに約半數の簡のカード化をおわつた。勿論釋文に記された原簡編號をたよりにしての工作であるから、それにも誤記があることであろうし、また番號のみで正確な地點を知らないために、この出土地別の排列は完全正確なものに仕上げることは困難である。しかし出土地別の排列が、居延漢簡釋讀の上で有力な鍵になることは期待されてよい。その期待は本號掲載の岡崎氏論文に取扱われた吏卒長物名籍の例からも察知できるであろう。

ともかくわれわれの居延漢簡研究は、上述の如く目下基礎工作に力を注いでいるわけであるが、今まで一年有半、主要

な簡について釋讀しつゞける間に、各自の札記が積まれて來たため、この際、夫々のノートを整理して各自一篇ずつを發表することにしたわけである。本號に掲載したものの外、前號に豫告しておいた藤枝氏の「錢穀札記」をはじめ、班員諸氏のノートは累積しており、近い將來、それらをも整理して發表される豫定である。本特輯號を出すに當り、居延漢簡の解說とその研究の經過、ならびにわれわれの研究概況を報告した次第である。

（本稿は昭和二十七年度文部省科學研究費を交付された「カラホト附近出土漢代文書の整理並にそれによる漢代史の總合的研究」の成果の一部である）

註

① タイクマン著・神近市子譯「トルキスタンへの旅」（岩波新書）六一頁。

② 岩村忍「マルコ・ポーロの研究」上卷二二二頁。

③ 松田一政「西夏の死都カラ・ホトの調査の概要について」（東方學報京都第十九冊）。

④ 勞氏「居延漢簡考釋」考證之部下卷。

⑤ A. Stein, Serindia p. 598.

⑥ 夏鼐「新獲之敦煌漢簡」（中央研究院歷史語言研究所集刊第十九本所收）附錄二。

⑦ 勞氏考釋活字本上冊三五六―七頁にその寫眞を收め、その釋文は同じく上冊四一三頁以下に載す。廣地南部候より報告された永元五年（A・D・九三）六月から同七年六月までの兵器簿である。

⑧ 簡牘の制度に關しては王國維「簡牘檢署考」（鈴木虎雄博士の邦語譯が『藝文』三卷四・五・六號に載せられている）、傅振倫「簡策說」（考古六期）、黃文弼「釋簡牘制度及書寫」（羅布淖爾攷古記第九章）、原田淑人「支那古代簡札の編綴法」（東方學報東京第六冊）、石田幹之助「支那西陲發見の木簡について」（書苑一號）など先人の業績が數多く發表されているから、こゝでは贅說を避ける。

⑨ 馬衡「記漢居延筆」（國學季刊三卷一期）この筆は一九三一年一月、ムヅルベルジンで採集されたものという。

⑩ ヘディン著・隅田久尾譯「ゴビ沙漠横斷記」二六二頁。

⑪ F. Bergman, Travels and archaeological field-work in Mongolia and Sinkiang (History of Expedition in Asia 1927～1935, Part IV) p. 114.

⑫・⑬ ヘディン「ゴビ沙漠横斷記」英語版序文。

⑭ 勞氏考釋（石印本）後記。

ベルグマン前揭書一四七頁。Mu は蒙古語で破壞の意、Durbeljin は方城、四角い城の意、破城子と譯される。勞氏もいう如くスタインの地圖に見える Ikhe-durbeljin（大方城）のことかと思う。

⑮ 馬氏前掲論文および勞氏考釋（石印本）後記。

⑯ ペルグマン前掲書一三八頁。

⑰ 肩水都尉は漢書地理志にも見えないが、塩鐵論復古篇に扇水都尉の彭祖なるものの言が引かれている。この扇は肩の誤とみてよいかと思う。これも居延漢簡の出現によつて明らかにされた事實である。肩水はエチナ河乃至はその支流をさすかと思うが斷定できない。因みに居延漢簡に見える居延都尉および肩水都尉に隷屬する候官の名稱とその現在地名（勞氏の比定よる）を左に掲げておく。

居延都尉
- 居延候官　カラ・ホト
- 殄北候官　ワヤン・トレイ
- 甲渠候官　ボロ・ツォンチ
- 甲渠候官　ム・ツルベルジン

肩水都尉
- 肩水候官　ウラン・ツルルジン
- 廣地候官　雙城子北城
- 橐佗候官　ダバン・ツルウルジン

⑱ 拙稿「最近に於ける中國學界の動向」（東光二號）。

⑲ 蘇瑩輝「中央圖書館所藏漢簡中的新史料」（大陸雜誌三卷一期）。

⑳ 黃氏「羅布淖爾攷古記」二二〇頁注九參照。

長沙出土の漢簡

今世紀に入つて、まず敦煌から約一千點の漢簡が發見され、つづいて居延から一萬點に及ぶ大量の漢簡が出土して人の注意をひいたのであるが、こんどはすつかり方角のちがつた湖南の長沙から漢簡が發見せられた。長沙近郊の古墓は、昭和の初め頃から盜掘されていたが、一昨年の十月十八日から昨年の二月七日まで、中國科學院の考古學者たちによつて、組織的な發掘が行われた。この際に、わずかに一簡ではあるが、「被絳函」と記した漢代の竹簡が發見されたのである（夏鼐氏「長沙近郊古墓發掘記略」科學通報三卷七期）。なお別に先秦のものと思われる簡も出土したことが、同報告に記されている。これこそは「孟子」にいう所の楚のトウコツに擬されるものかも知れない。孟子に魯の春秋と晉の乘と楚のトウコツとを並擧しているが、そのうち魯の春秋は孔子の刪定を經て古典に列せられたものであり、晉の乘とは紀元後三世紀に河南省汲縣の古墓から發見された「竹書紀年」に相當するものであろう。ただ楚のトウコツなるものは今まで傳說に止まつていた。それが科學院の發掘によつて、孟子にいう楚のトウコツらしいものの片鱗がうかがえるようになつたわけである。

關嗇夫王光

序說に述べた如く、われわれの現在の工作の一つに居延簡の人名索引作製がある。まだ完成に至らないが、もしこれが完了すれば居延簡を解釋する上において有力な鍵を提供するであろうことが期待される。その一例として未完成の索引の中から表題の人物をぬき出して紹介することにしよう。まず關係の原簡を示すと次の如くである。

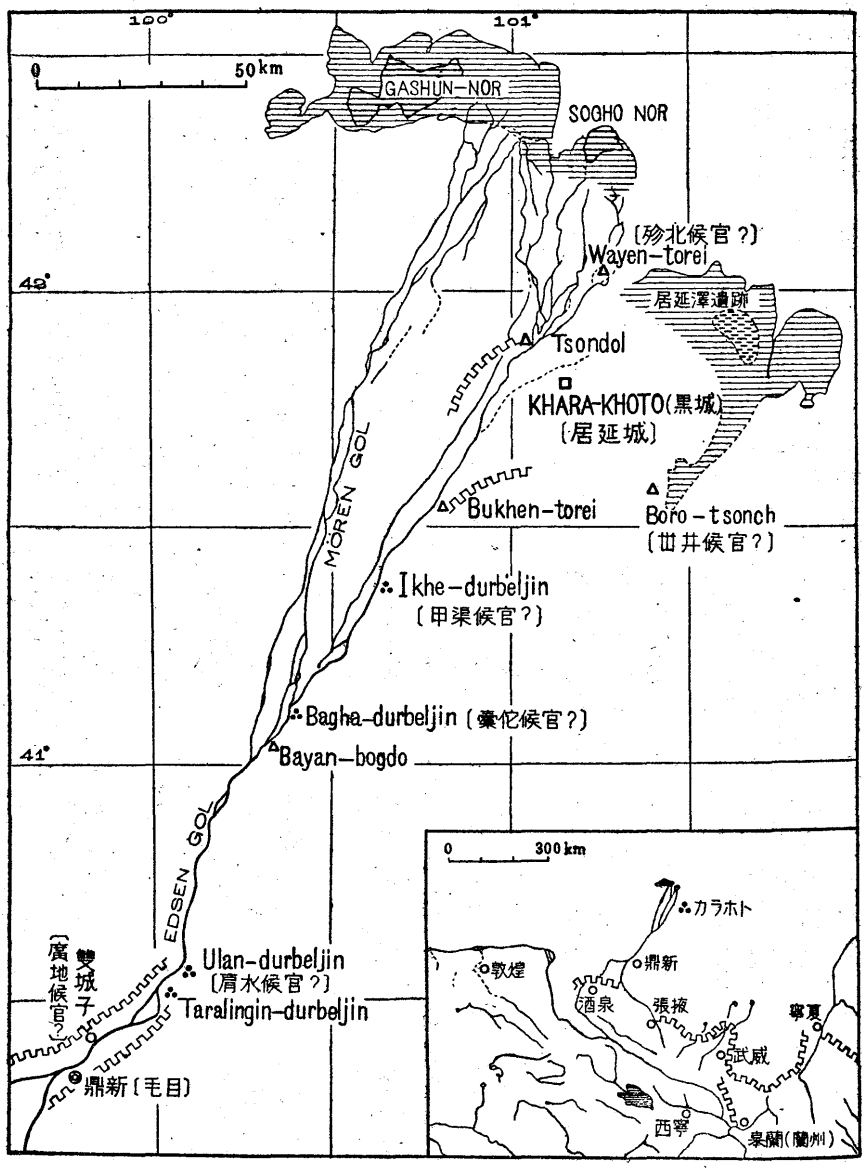
(一) □□元年十一月壬辰朔甲午肩水關嗇夫光小官印行候事敢言之出入簿一編敢言之(面)佐信(背) 一九九・一

(二) ☑令／嗇夫光佐信 三五三・四

(三) 關嗇夫王光 令調兼□候 三三七・三五

(四) □□□□嗇夫王光 十一月奉錢七百廿 十二月辛酉□□□□ 三一・八

これらの簡は、勞氏の考釋ではそれぞれ分類されて、(一)と(二)は文書の書檄類に、(三)は簿錄の名籍類に、(四)は同じく簿錄の錢穀類に收められ、互にはなればなれになつている。しかし人名索引によつてたぐりよせてくると、同一人物であるらしく思われる。(一)の出入簿の上には脫字が數字あると認められるが、ともかく肩水の關所の役人である光なるものが候卽ち肩水候官の代理として、見錢か財物か何かの出入簿を上級官廳——多分肩水都尉に送り屆けた文書である。その文書の背に補佐官の信なるものの署名が見えるが、この光と信との組合せは(二)も同樣であるから、ほゞ同時の文書であることが知られる。上の令の字は恐らく漢代文書に常見する如律令の令であろう。ではこの文書の年代如何というに、(一)には月日は明記しているが、年號がよく讀めていない。そこで元年十一月一日が壬辰である年を調べてみると、甘露であることが明らかなので、(一)は西曆紀元前五十三年十一月三日の文書ということになる。從つて僅かに六字しか讀めないが、(二)もその頃の文書と斷定することが可能になる。次に(三)からは光なる人の姓が王であること、(四)からこの人の月俸が七百廿錢であつたこと、そしていずれもBC五三年頃の簿錄であることが知られるのである。因みに(四)の末尾が讀解されていないが、十一月の月俸を十二月の辛酉の日に自ら赴いて受領したか、或いは他人に代つて受取つてもらつたかが記され、最後にサインがしてあつたと思う。又もしこれが甘露元年のものとすると、十二月辛酉は丁度朔日にあたり、當時俸錢受領の慣例を示すものとして興味がある。その他、居延地方の關所や、通關手續、その役人を關(門)嗇夫と稱したこと、小官印のことも述べなければならぬが異日の機會にゆずる。(森鹿三)



エチナ河流域圖（候官の位置の比定は勞榦氏による）

Introduction to the Studies of the Etsin-gol MSS. Discovered by Seven Hedin in Chinese Turkistan

Shikazo Mori

The Han MSS. discovered in 1930 by the Sino-Swedish Expedition near Khara-khoto on the Etsin-gol constitute an exceedingly valuable source for the history of Han. A group of Japanese specialists on Chinese history has been studying these records, amounting to over ten thousand pieces from various angles with Mr. Lao Kan (勞榦)'s printed edition as the text. In the present article the auther gives preliminary notes on various problems involved in studying the MSS.